医療タイムス

週刊医療界レポート

2013.9/9 No.2124

特集

これからの地域包括ケア

医療連携と地域連携

タイムスインタビュー

東京青年医会から学んだことは多大
常に夢と勇気、情熱と誠意と知恵を持って進みます

医療法人社団永生会 理事長
東京青年医会 名誉代表
安藤高朗氏

病院経営に生きる交渉術

コスト削減とローコストオペレーションとの違い

Top News

消費税8%時対応、基本診療料を引き上げ 消費税分科会

2014年度予算概算要求を発表 厚労省

冬の時代の診療所経営

医療否定本をどう思いますか？

医療法人社団裕和会理事長
長尾クリニック(尼崎市)院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」「平穏死という親孝行」など。
クリニックHP　http://www.nagaoclinic.or.jp
長尾和宏オフィシャルサイト　http://www.drnagao.com/index.html

書店の店頭には、医療否定本が並んでいます。「がんを手術してはいけない」から始まり、「血圧も血糖も高いほどいい」と続いています。ついにここまで来たのか、と思いました。そうしたら患者さんがこの本を診察室に持ってきました。「先生、私は糖尿病で薬を飲んでいますが、飲んではいけないと偉い先生が言っています」と。その方の血糖値は500を超え、HbA1cは10%を超えています。根気よく説明しましたが、結局偉い先生の本が勝ち、服薬中断となりました。また先日こんな患者さんがいました。頭痛とめまいで歩けないというその方は、血圧が250/130でした。以前は血圧の薬を飲んでいたが、「血圧は高いほど長生きする」というベストセラーを読んでから、通院をやめていたとのこと。

またこんな患者さんが来られました。乳がんで抗がん剤治療中であるが、著者の先生のセカンドオピニオン外来を受診されたそうです。すると「抗がん剤はすぐにやめて、ホスピスに行きなさい」と言われ、宛先のない紹介状を渡されたということです。まだまだ元気で、ホスピスに入るほどには到底見えません。泣きじゃくるその患者さんにかける言葉が見つかりませんでした。たった1回の面談でその患者さんの運命を180度変えていいのだろうか。高価なお金をとりながら、あとは野となれ山となれといったフォローのない医療が、本当に医療と言えるのだろうか。そんな素朴な疑問が浮かびました。

がんセンターに勤務する知り合いに聞くと、放置療法を大きく取り上げた週刊誌を持ってくる患者さんがおられて、肝心の説明の前に、放置療法の説明のほうに時間がかかってしようがないとの話でした。書籍やメデイアの影響力はすごいものです。もちろんがん医療や、生活習慣病医療には多くの課題があるのは自明で、早急な是正が必要だと私も思います。しかし私は医療を全否定することはあり得ません。それは、自分も医療人の1人であると小さな誇りを持っているからです。たとえ町医者であろうが、大病院の偉いポジションにいようが、この志だけは普遍的なものであると信じています。私は終末期においては、無用な延命治療はなるべく避けて緩和医療を中心に考えることを啓発しています。終末期においては、緩和医療という名の医療の恩恵にあずかれることを願っています。

高齢者やプアリスクの人にはがん放置療法は昔から普通にあります。またがんもどきという言葉は、悪性度という言葉として昔からあります。目新しそうな言葉で素人を魅了するのは自由ですが、すでに順当な成果を上げているがん医療を全否定するだけでなく、生活習慣病全般にまで拡大するのは、いかがなものか。あまりの極論が、知らぬ間に正論になりつつあります。ともあれ、すでに少なからず実害が出ています。

私は、おかしいものはおかしいと声を上げてみました。8月20日に「医療否定本に殺されないための48の真実」(扶桑社)という本が出ました。案の定、発売直後から、否定本の信者さんから猛烈な批判を浴びています。「反論のエビデンスを示せ」とのことです。患者さんがエビデンスという言葉を使う時代です。私は、ただ「王様は裸だ」と言っただけです。本誌の読者の皆様のご意見、ご批判をお待ちしています。